

国語の「ゆれ」の一考察

外来語は国語のどの部分にどのように進入しているか

(その一—漢語)

白 木 進

一、現代日本語にみる「ゆれ」の背景

近来「日本語の乱れ」が論ぜられるが、その殆どは次の三点にしばられる。

(1) 外国語が氾濫している。片カナ文字が多すぎる。

(2) 言葉遣いが乱れている。特に若い女性の言葉がぞんざいになった。

(3) 漢字を知らない。誤字が多い。大学生になっても碌に手紙すら書けぬ。

確かにその通りであり、当に国民挙つて反省すべきことである。

然し「コトバは動く」と知れば、前記のそれは「国語の不断の推移、自然の変化」の面もあって、一概に「乱れ」とのみは断じ得ぬことも認めねばなるまい。要は推移・変化の過程における調整の可否である。即ち

(1) については——凡そ物には新陳代謝がある。伸びる為には新しい血が必要だ。「やまと言葉」は嘗ては漢字・漢語を取り入れて、

大きく動揺変化したし、今は洋語・洋字に直面して、多少の混乱を見せつゝも、健気に之を撰取消化して、新たな糧としようとして

している。いわゆる片カナ文字は新しい外来語であり、いわば嫁格、之に対し今では姑格で納っている漢字漢語も亦嘗ての外来語である。

(2) については——明治維新は四民を平等に解放し、教育の普及を齎し、更に戦後の民主主義は人間の尊重を説き、男女の同権を強調した。かくて厳しかった上下の階級制度は漸次力を失い、古い男尊女卑の風は今や崩れつゝある。昔の日本は、

魏志(三世紀後半の作)晋)倭人伝曰、……尊卑各有差序。……下戸與大人相逢道路、逡巡入草、伝辞説事或踰或跪。

黄氏聞見録(黄宗義—清)曰、倭国之俗、上下截然、礼貌甚。敬畏遵奉、不敢怠忽。盖以少有所失、必至於死也。

尊上卑下から生れた敬語、逆に又それを培つて来たであろう敬語が、階級制度の崩壊と共に衰退するのは当然であり、女性が男性

国語の「ゆれ」の一考察 外来語は国語のどの部分にどのように進入しているか(その一—漢語)

と対等となれば、女性の言葉が男性に近づくのも亦当然である。いわゆる敬語は、今や在来の上下関係を主とした尊敬語・謙讓語から脱却して、左右関係を調和する丁寧語として、新たな観点から之を見直し、之を育成すべきであろう。

(8) については——「漢字御廃止」の建議（慶応2—前島密）以来、漢字をどう扱うかは、今に至るまで論議的であるが、日本の国語政策としては、漢字の制限使用、漢字交りのかな文を採用して来ている。どの程度に制限し、どの程度に使用するかが問題であるが、先に公示された当用漢字一八五〇字は今日における一応の標準である。

但し漢字は一字—一語—一音—一声の表語文字であるから、ことばの推移と共に、不断に実情に副う改廃を図るべきで、10年、20年と放置しては必ず差誤を生じる。

この程度の漢字は上手に駆使できるように教育法や教科時間の改善を考慮すべきだが、

「大道は文字の上にあるものと思ひ、文字のみを研究して学問と思へるは違へたり。文字は道を伝ふる機械にして、道にあらす。」（二宮翁夜話）

と尊徳が喝破せる如く、今日のことばが主であつて文字は従。漢字に対する感覚も昔とは違つて来ている事も知らねばならぬ。手紙については、交通が発達し、電信・電話の普及した今日は、その用途も趣きを異にし、価値も違つて来たので、改めて見直すべき問題であろう。

進んで改廃すべき語・態度

世の進展に伴つて、之に必要な新しい言葉が増加するのは当然であるが、その反面に不要となつた語の廃棄にも積極的でありたい。例えば

(1) 実用生活面で—度量衡にメートル法を採用した今日では、八咫

八咫ヤタ・八尋ヤヒの如き上代語は固より、慣れ親んだ尺貫法の語や言葉も深く古典語にくり入れ、メートル リットル グラム *m*

m などに熟すべきである。

(2) 道義的な、また世俗的な面では

未亡人 後室 後家 などは、由緒は古くても今日では正しく人權を損ずる言葉で追放に値するし、下女 下男 女中 丁稚

小使 や 野郎 百姓 など、階級意識の強い語、原義からずれて今日では聞く当人が喜ばぬ言葉は、進んで改廃するがよい。

なおやめたいものに、軽薄な片カナ言葉と共に、漢語にも聞いただけでは理解できぬ無理に音読したような学術語、専門語がある。

白鼠ハクネ（医学）軌條折損（鉄道）播種（農業）などは、しろねずみレールが折れる 種まき でのいのではないか。（文学にも昔では之に似た例があつた。漱石—倫敦塔 逍遙—該撒奇談 自由太刀

余波ナゴリノキレ鋭鋒……今なら、ロンドン塔、ジュリアスシーザー物語）

言葉は意志の伝達であり、感情を表現する。黙殺は侮辱であり、無言は時に恐怖を誘う。進んで挨拶し、美しい言葉を交換しよう。

「お早よう」。「今晚は」。「今晩は」の紋切型もよい。「ありがとう」。「失礼します」。「済みませんでした」。などは、言う側も聞く側

も飽きることのない快い言葉だ。足を踏まれても、I'm sorry、と英人は応ずるそうだ。日本には「どうも、どうも」という、どんな場合にも通ずる便利な言葉もある。

精神面における反省

わが国民性を省みるに、新奇を好むと共に、先進外国を崇拜する気風が強い。この二面は日本人が進取の氣象に富む事を示すもの、従来も先進文化に接しては勇敢に之と取り組み、消化摂取して己を伸ばすに役立てて来た。但し度を逸すれば、新は総べて良く旧は総べて悪くとなって中庸を失い、又、舶来は総べて尊く国産は総べて卑しくとなって均衡が保てなくなる。常に行き過ぎは強く反省自戒すべきである。

二、日本語における固有語と外来語

日本語は奈良朝から数えても既に千二百年を経過する古い言葉である。その以前は頼るべき資料文献が乏しいが、漢字・漢語の渡来は紀元前後のことと目されるので、始めての文字としての漢字が、又外国語としての漢文が歴史以前に既に伝わっているのを知る。

日本語における固有語と外来語とを分類したものに、古くは言海がある。

和語	二一、八一七	五五・八%
漢語	一三、五四六	三四・七%
和漢熟語	二、七二四	七・〇%

国語の「ゆれ」の一考察 外来語は国語のどの部分にどのように進入しているか(その一—漢語)

外来語	唐音語	五四九	一・四%
	梵語	……	
	……		
	……		
和外来熟語	二三五		
漢外熟語	二一七		
和漢外熟語	一三	一・一%	
外外熟語	二		
合計	三九、一〇三		

言海は明治十七年十二月の稿で、初版は同二十二年。当時の日本語の内訳が推知できる。

この割合がその後どのように変化したかを時枝誠記編「例解国語辞典」(昭和三十一年初版)で調べた宮島達夫氏の統計が言語生活の33年4月号に見える。引用すると、

和語	一四、七九八語	三六・六%
漢語	二一、六五六語	五三・六%
和漢熟語	二、三〇七語	五・七%
外来語	一、四二八語	三・五%
その他	二〇四語	〇・五%
合計	四〇、三九三語	

日本語の中に漢語が如何に多いことか。言海では二位だが、後者では一位に上り、その比は五三・六%となっている。

外来語は一般に文化の程度の高い国の言語から、低い国の言語へと行われるのが原則で、又文化的接触の大きい場合ほど、多くの借用が行われるという。日本人は早くアイヌと接触し、朝鮮と交わつ

た筈であるが、日本語の中に意外とアイヌ語、朝鮮語の少ないのは、右の原則に拠るものか否か。ともあれ日本における外来語の宗は、嘗ては漢字・漢語であり、そして今は洋語、殊に英語である。明治以後、特に戦後の日本語において、洋語の使用率は大きく、また語原別に見れば英語が圧倒的である。

国立国語研究所が現代雑誌九十種の用語・用字を調査した(昭和三十一年)結果の表に、

異り語数

語種(%)

雑誌の種類	和語	漢語	外来語	混種語
一 評論・芸文	三九・九	五一・八	五・〇	三・三
二 庶民	三五・九	五四・三	五・七	四・〇
三 実用・通俗科学	二八・八	六〇・三	七・〇	三・九
四 生活・婦人	四四・七	三九・一	九・九	六・二
五 娯楽・趣味	四一・三	四五・七	八・三	四・七

原語別に見た外来語(異なり数)

語数 %

英語	二、三九五	八〇・八
フランス語	一六六	五・六
ドイツ語	九九	三・三
オランダ語	四〇	一・三
……………(その他)	二六四	八・九
計	二、九六四	九九・九

(現代雑誌九十種の用語用字(3)62べ、64べ)

三、漢語は国語のどの部にどのように進入しているか

漢字・漢語が日本に伝えられたのは紀元前後と言われ、(例えば我が国にも幾つか出土した王莽の泉貨は紀元14年の鑄造であり、志賀島発掘の「漢委奴国王」の金印は後漢の中元二年、紀元57年に受けたもの)呉音は五々六世紀、漢音は七々八世紀の伝来と言う。歌語に見る漢語

最も古い日本語の形を温存した歌語には、萬葉集、八代集を通して見ても、当時は既に滔々として進入していた筈の漢語が、探しても数える程しか見当らぬ。

萬葉集には

イ、餓鬼 香 功 刀自 五位 采 双六 法師

ロ、藐姑射(能山) 無何有(乃郷) 力子(舞)

ハ、婆羅門 檀越 塔 (漢字を使った梵語)

などが見えるが、みな巻十六に出る。巻十六は啜る(啜^{アサケ} 咲^{アザケ} ぶ)歌が多くあり、之らの歌に右のような漢語、漢字を使った梵語が見える。

其の他の巻では次の例がある。

布施^{クツツ}おきて吾はこひのむ(巻五)

過所^{クツツ}なしに関とび越ゆる時鳥(巻十五)

池田朝臣が大神 朝臣奥守を嗤る歌(16―三八四〇)
寺々の女餓鬼申さく大神の男餓鬼賜りてその子産さむ

右の歌に見える寺は朝鮮語だと言われる。

B, Karlgren は Philology and Ancient China (1926) の中で、シナ語から日本語へ入った単語として、

- 邑 (いへ) 室 (ごと) 築 (つく) 橘 (かき) 析 (ぎく)
- 闕 (ゆか) 絹 (きぬ) 袖 (しね) 蚊 (かひ) 竹 (たけ)
- 麦 (むぎ) 杉 (すぎ) 琢 (とく) 剣 (はぐ) 溼 (しほ)
- 郡 (くに) 盆 (ふね) 鎌 (かま) 夏 (なつ) 馬 (うま)
- 梅 (うめ)

を挙げている。

元來歌語は古形を尊び新語を斥けるので、音便は勿論、外来語は使用しないのであるが、前記の朝鮮語からと言われる寺、カールグレンの挙げる馬、梅などは字音語としての意識もなく、縦横に使われているのを見ると、之らは外来語としては余程古い帰化語なのであろう。

八代集に見る漢語例

思へども閻浮ユヅの身なれば (古今19—1001)
敷シなればいともかしこし (拾遺9—531)

前者は漢字で書いた梵語であるから、後者が八代集では漢語を用いた唯一の例だと言われる。(吉沢義則—国語史概説115p)

「文」という語は、カールグレンの挙げた21語の中に入っていないが、やはり古い字音語であらう。「文」を詠み入れた和歌は、後撰18卷—二一九、拾遺19卷—二〇二などに見える。

宣命(口語体)に見る漢語

国語の「ゆれ」の一考察 外来語は国語のどの部分にどのように進入しているか(その一—漢語)

国王 王位 職事 賞罰 大事 弟子 博士 謀反 力田 辺成
 孝義 礼レイ 樂 不可思議威神(之力) 螺寡孤独 斬 最勝王經
 盧舍那仏 菩薩 如来 觀世音 吉祥夫 舍利 禪師
 又やまと言葉に訓ユんではいるが、左の如きは漢語からの翻譯語であらう。

天ツツカ 神ケ 地クニツツカ 祇
 物語に現れる漢語

物語の祖と言われる伊勢物語には

名詞—西の対 本意 築地ツキヂ 女御 下臈 益なきもの 修業者
 奥に 菊の花 前栽 氣子(飯を盛る器) 御達ミダテ

動詞—念じ 化粧じ 懸想じ

形容詞—怪しう

などと、未だ数は少ないながら、幅が広くなり、奈良朝では名詞だけであったのに、之には名詞の外に、動詞(サ変)形容詞にも出る。

竹取物語については塚本勝義氏の調査によると、漢語八十八、梵語三で品詞別では、

名詞	漢語	五九	梵語	三
動詞	漢語	一一	梵語	三
形容詞	漢語	一四	梵語	三
副詞	漢語	二	梵語	三

という。(新講国語学概論76p)

動詞は全部サ変。形容詞は「怠々し」。副詞は「切に」「優に」の

二語。梵語は瑠璃、優曇華、寶頭盧の三語、鉢を梵語と数えれば四語。但し之らの物語は女子の用語をもとにして書いたものであるとすれば、男子の用語の中にもっとずっと多いことであろう。

思うに平安の初期は漢文学の隆盛期であった。男子の教養は漢文であり、漢詩であり、従つて日常用語も漢語が多かつた事は当然推定される。

之に反して、仮名物語は婦女子相手の文学で、女子の用語を主とした。

野守鏡に次の話が出てゐる。

藤原保昌、歌をうらやみて

早朝におきてぞ見つる梅花を

夜陰大風不審不審よ

とよみたりける。和泉式部〔保昌の妻〕きゝて、

歌詞はかくこそよめとて、

朝まだきおきてぞ見つる梅の花

夜のまの風のうしろめたさに

とやはらげたりける。同じ心とも覚えずおもしろく聞ゆる。

源氏物語になると、女流の手に成つたとは言え、漢語は漸くその数を増す。芳賀矢一氏の国文学歴史代選序論にいう、

「平安朝の物語には、漢語を日本化せしが、その分量極めて少し。試に源氏物語の桐壺の巻を通算するに、百五十余の漢語を含めり。」(58ペ)

源語は全篇54帖、一篇に平均百五十の漢語を含むとすれば、全篇

では凡そ八千百語となる。

その後、鎌倉・室町と下るに及び、漢語は今昔や平語などに大きく増加を見せ、仏教の法話・軍記物・語り物により、耳を通して広く民衆の間に浸透して行く。前記国文学歴史代選序論に軍記物語の文章を述べて、

軍記物語は、……文辭の方面に於ても亦之と同じく、漢文の剛健なる要素と、国文の優麗なる性質とは、相混して全豹の美を作れり。漢語は促音・長音・濁音等多く、単語として已に音の變化に富む。……

保元物語は〔漢語が〕一丁にして尚四十に及べり。

重代ノ 歴代ノ 不重宝ナル 奇怪ノ 一定ノ 神妙ノ の如き形

容詞、

入洛ノ上 晏駕ノ後 下向ノ路スガラ の如き動詞

処 間 上 等の如き副詞的接続詞、

何ゾ 況ヤ 綵ジテ 就中 以テノ外ニ 随分ニ 全ク以テ の如き副詞

等、語彙の性質は全く平安朝の物語とは一変せり。

就テハ 於テハ 以テハ の如きは、已に助詞として用ゐらる。

……

こはこれ単語の論なれども、句法に於ても漢文訓読其儘の形なるもの尠からず。蓋し漢文軍日記の祖ともいふべき将門記等には、四六文の対比を用ゐたる箇所最も多し。(58—59ペ)

柏谷嘉弘氏は徒然草の漢語を調査して、

語数	比		平均使 用度数 B/A
	A	B	
一字語	二四二・七・九	六七九三〇・四	二・八
二字語	八七六六四・九	一二八一五七・三	一・五
三字語	一三五一〇・〇	一六六七・四	一・二
四字語	七五五・六	八四三・八	一・一
五字語	一六一・二	二〇〇・九	一・三
六字語	四〇・三	四〇・二	一・
七字語	一〇・七	〇・四	一・
計	一三四九	二二三五	一・

と表示し、

平安朝の仮名文学作品の漢語と比較して、二字語の語数の割合が増大している。使用度数の割合、平均使用度はさして変化がない。

漢語のサ変動詞は七十九語、接尾語のついた漢語動詞は「上手めく」の一語のみで平安朝の仮名文学作品に比して単純化していると説明する。(国語学77集 89ペ)

山田孝雄氏の「国語の中に於ける漢語の研究」(昭和14年刊 序文に 東北大学における昭和六年度の講義という。)に拠れば、

先ず外来語を解いて(13ペ)

1、純なる外来語 いわゆる片カナ語

国語の「ゆれ」の一考察 外来語は国語のどの部分にどのように進入しているか(その一—漢語)

2、狭義の外来語 インキ テーブル

3、借用語 たばこ きせる

4、帰化語

となし、帰化語については更に詳しく説く。

元来外国語が国語にとり入れらるる最初の状態を考ふるに、それはただ或る概念をあらはすものとして、取扱はるるに止まるものなるが、それが資格は概念語として単に体言の取扱に準ぜらるるものとす。……………

然るにそれが今一歩進みて国語に帰化するときは、単純なる体言の取扱を受くるに止まらずして、或は国語にての用言副詞としても用ゐらるるに至り、或は国語の造語法の活動に支配せらるるに至るべきなり。かくの如き域に入るときに、はじめて帰化語と称せらるべきなり。(16ペ)

とし、その本義の意義により国語にての取扱方を左の四種に別つ。

一、体言素 名詞素 天地ボーイ

代名詞素 僕 貴下

数詞素 一 百 萬 ダース

二、動詞素 運動す タッチする

補語を伴う—研究に熱中す。

準体言の形—研究に熱中のみ、

三、形容詞素 永久に 漠然と

格助詞の に、と、を従へ状態副詞

太平なり。歴々たり。

なり、たり、を従へて形容存在詞

四、副詞素 元來 爾來 一切(18~22ペ)

次に国語の中で扱われる漢語の性質を分析して、

1、国語に入れる漢語の大多数は、体言、殊に名詞として扱われる。

2、副詞として取り入れられる。

無上^{ムシヤウ}に 折角 気楽に 状態の副詞

至極 可なりに出来る 程度の副詞

3、用言とする。

イ、形容詞 執念し 非道い

怪し 鬱陶し

愛らし 乱がはし

ロ、動詞 乞食く 敵対ふ 力む 料理る 感^{カマ}く 意地める

上手めく 気色だつ

サ変 試験す (476~481ペ)

を挙げ、続いて

漢語の国語の内に侵入せる区域と侵入を許さざる区域

を論じて、

外国語を借用する分野は、体言を主とし、深く侵入した場合も副詞と用言との間に止まる。とし

(1) 国語運用の生命たる助詞には外国語の侵入することは一歩も

寛假せず。

(2) 用言の語尾も亦、他の侵入を寛假すべからぬ地点なり。

(482~483ペ)

と断ず。但し(2)については、

百日参籠の大願……用言の準体言としての取扱を受くる場合

ごほうび頂戴な……用言の命令形の用をなす場合

を警告的に挙げてゐる。

室町の末期には、キリスト教の伝来に伴ない、新たに西洋語が入つて来る。(デウスー神 アンジョー天使 イルマンー修道士など)主としてポルトガル人によるポルトガル語である。漢語とは違った面で、国語はまた新たな外来語を迎えたが、然し軀て禁教の事あり、貴重な資料は残したが、この度は大きな影響を国語に與えぬ中に消え去り、西洋語の新しい進出は幕末・明治期を待つて行われる。

要之、漢語は外来語ながら、歴史は古く且つ国語と歩みを共にして来た面もあつて、国語の各方面に浸透し、広く体言に用言にそして副詞に、更に今日の口語では連体詞にも多く、又、動詞の連用形につき接尾語となつて(……知らせが、来次第、行く。)陳述にも一役買つてゐる。ある面では国語の基盤として一部を支え、その強い造語力は今も必要に応じて新語を生み、今後とも国語の中に逞ましく生きて行くであらう。

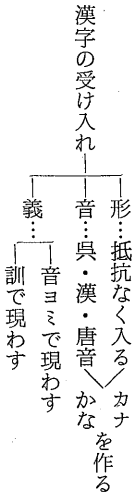
四、文字(漢字)と国語

アルハベットを文字とする西洋の言語学では、文字を、言語又は言語の一要素としては認めないようである。蓋し表音文字であり、

国や民族は違っても文字は共通であり、それぞれの国語と特別な関連が少ないからであろう。然し日本における文字としての漢字、日本語にしめる漢語は之と趣きを異にする。

凡そ一つの文字が、文字を持たぬ国、民族に進入して採用される時、文字は言語の相違の故に、表音的に利用される。象形から生まれ、表意・表語文字と言われる漢字の場合も同じで、本家の中国は別として、漢字を伝えた朝鮮、安南（ベトナム）などは、伝えられた当時の音を本に、それぞれの国語音に合わせて音のみで使用し、足らざる部は国字を作つて補つてゐる。

然るに日本は、始めは同じく音文字（萬葉仮名）として使つたが、漸く慣れるに及んでは、漢語を音読することと並んで、之を和語に当てて訓（日本語の表語文字）の用法が生まれ、又熟しては和漢語（荒武者）、漢和語（最はて）、更には日本製漢語（火の事↓火事 かねての題↓兼題）、漢語製やまと語（当然↓当前↓あたりまえ 同然↓同前↓前に同じ）洋語製漢語（カタログ↓型録）などもできた。表示すると、



訓は外来の漢字を、在来のやまと言葉に当てたものであり、内容は彼我同じの筈であるが、中には風土の相違、時代の變遷で指す事物が異なるものもある。（走歩く（日本） 汽車自動車（日本））また本来の和語には無いのに、わざわざ中国の古典から取つて訓を新たに作る

国語の「ゆれ」の一考察 外来語は国語のどの部分にどのように進入しているか（その一—漢語）

例もある。

かね 日本語では金、銀、銅、鉄、鐘、曲尺、鉄漿、貨幣…など一様に概括してみな「かね」という。強いて区別する時に、左の二通りあり、

- 1、キン ギン……（音で）
- 2、こがね（くがね） しろがね……（訓で）

ところで銅をアカガネ、鉄をクロガネと訓ずるのは、「玉篇、銅、赤金也」。「説文、鉄、黒金也」。にとる。

なお右の如く日本語に抽象的・概括的な言葉の多いのは、国語の一特質である。安藤正次氏は、国語の特質を二つに分け、（古代国語の研究三〇五ペ）本質的特性と第二次特性とし、後者の第一項に、国民が抽象的・概括的な性情を持ち、之が言語に現れたと述べている。

中国の四周に、その昔、中国文化にあやかり、漢字を採用した国家・民族は少なくないが、契丹、西夏、女真の如きは夙に亡び、安南（ベトナム）は一八八七年、仏領となりし以後は、漢字音を残しながらも、フランス式ローマ字が国字となり、朝鮮も北朝鮮は一九四八年建国と共に、漢字を廢してハングル（昔は諺文と言つた）を採用、南韓国も一九七二年までには全面的にハングル（한글）を用いる予定である。ひとり日本は、漢字を受け入れて影響最も大きく、一面では漢字文化の進出で国語の発達を中断せしめられた点もあるが、反面また縦横に漢字を利用し発展させ、今後も之を駆使して、国語の表記に、国語の造語・運用に活用しようとしている。

五、漢字・漢語音の、国語に及ぼせる影響

漢字は一字一音一語一音一音二声である。一つの漢字は一つの単語であり、字音と共に一つのアクセント（高低と強弱と）を持つ。且つ多くが単音節、閉音節であるに反して、国語は多音節、開音節である。この故に漢字音、漢語音の摂取に当っては、多くの困難を伴ったが、大学寮には音博士十二人を置き、原音を忠実に伝うべく努力している。

シナ語音は音と韻とに分かれ、(ヤハレ、ヤハレ、ヤハレ) 詩作などには之も肝要であるが、日常には之を分けて発音するのではない。四声にも注目し、声点(声符)を漢字の四隅に施したが、之は鎌倉時代から廃れた。(声明や謡曲の譜には残る。)

漢字音が国語音に齎した影響の主なるものを列挙すれば、

- 音
- 1、濁音が語頭にも用いられるようになる。
- 2、ラ行音がク
- 3、促音の発生
- 韻
- 1、拗音(ヤ行開拗音、ワ行閉拗音)の発生
修サ行オ、病ヨ者ウ、障ル子シ、など拗音を避けた様子も見える。
- 2、母音のイ、ウを重ねることが起こる。(重母音)
- 3、鼻音を単独に用いることが生じた。

4、入声を用いることが生じた。

日記ニ 読経トの如きは、入声トを避けてのヨミか、或いは表記の不備で、実は入声で読んだのであろうか。

六、漢文脈・漢文訓読法の影響

紀に拠れば、阿直岐の来朝は応神十五年、王仁は十六年で、太子菟道稚郎子が就いて学ぶとあるが、当時の方法がシナ音直読であるか、朝鮮式訓読であるかは今は不明である。

訓読は中国原文を、助詞・助動詞を加えて、朝鮮語・日本語に翻訳し解説するのであつて、共用する漢字が表意(表語)文字であり、シナ語が孤立語であることにより可能である。

日本ではこの訓読用に朱や墨や角筆による点が文字に加えられる、やがて仮名の製作により、仮名を字側や行間に細書した。それは勿論一家の秘法であり、仏家点・博士点と多くの形式を残している。日本に最初に伝えられた漢籍は、記では論語・千字文であるが、中世栄えたのは漢詩文の文字であり、その訓読に苦心したことは、例えば江談抄四(雑事)に、

東行西行雲渺々 二月三日日遅々

此詩及後代菅家人室家令尋北野、令詠之間、天神令教て曰、とぎまにゆき、かうまにゆき、くもはるばる、きならぎ、やよひひうらうらと可詠云々

いわゆる「文選よみ」は、音訓複読で、文選に限らず、古代の漢文は多くこのように読んだ。室町の末、宋学が伝わるに及んで経学も

漸く芽を吹き、訓点も公開さるるあり、(桂庵和尚家法和点など)抄物類も多く出るようになる。

漢語を採用しない歌語の世界に於てさえ、例えば萬葉の反歌は賦の反辞の形式をとるものと言われる。況んや一般の行文、語法に於て、漢文脈、漢文訓詁法の與えた影響は大きく、之を佐藤喜代治氏は、

漢文訓詁と日本文法との交渉については、すでに山田先生の「漢文の訓詁によりて伝へられたる語法」においてその大略が明らかにされてゐるが、その大綱は、

一、一般には亡び去つた古代の語法が漢文の訓詁によつて伝へられてゐる場合がある。

二、固有の語法が漢文における意義用法によつて変化を起してゐる場合がある。

三、漢文訓詁のために新たな語法が按出せられてゐる場合がある。

この三つに分ち得る。(「日本語の精神」114頁)という。而して氏は漢文訓詁の影響はすでに奈良朝に現われてゐるとし、宣命の

夫 其 曾毛曾毛 置而(置天) 至天 極而 是以 然 而 而 相 及 但 即 所

を挙げ、六国史日本後紀以下では、

止伊_{止毛} 止云_{止毛} 或 況 乃

を示し、そもそも あるいはは しかるに ただし いはんや の如きは竹取物語を見ても出ているので、すでに仮名文においても相当の勢力をしめて行つたものあることを窺ひ得る。(同上121頁)という。この傾向は世が下り、漢文直訳風の文体(例えば今昔物語)

が盛行するに及んで甚しくなる。然し山田孝雄氏は「語法に及ぼせる影響」を総括して、

漢語が国語に侵入すること頗る多端にして国語の上に与えたる影響は決して少からず。されども、その語法上に及ぼせるものは著しきものにあらず。

として次の五項目を挙げ、

1、並びに 及び といふ如き接続詞の直訳の爲に生じたるもの

の

2、動詞が準体言、目的準体言として、又動詞の命令形の用法に

似たる場合に該当する如く稀に用ゐらるること

3、「トコロ」といふ語を用言に附属せしめて準体言に相当する

ものを盛んに使用するやうに導きしこと

4、「の」といふ格助詞によりて準体言を以て連体格に立たしむ

ることを盛んに起さしめたること

5、若かず……せんには はからざりき……ならんとは の如

き転倒の語法を盛んに用ゐるに至らしめたること

以上の1乃至3は、或いは国語の法格を多少乱したる如き嫌あれ

ども、4、5は寧ろ国語の語道を豊富にせりといふべきものなら

む。(国語の中における漢語の研究五二六頁)

結び

以上主として外来語としての漢語について述べた。新しい外来語としての洋語には触れることが少なかったが、文字面を除いて進入

国語の「ゆれ」の一考察 外来語は国語のどの部分にどのように進入しているか(その一—漢語)

の傾向は、程度は浅いが、漢語と似ていると思われる。

現在われわれが外来語という時、それは多く洋語を指す。漢語はやまと言葉ではないが、やまと言葉の一部が親戚かの如く考えられ勝ちである。それだけ深く国語内に浸透し、密接な関係をもつのである。

漢語は、今なほ造語力を持つてゐる。或は新造語の資源ともなつてゐると言へよう。……今日新しい内容、新しい感覚に対して新造語を試みようとする時には、最も多くの場合において漢語的資源に拠らざるを得ない有様である。(新村出―国語双録8ペ)

漢語の一つの特徴は簡潔である……その混入の為に日本語が引締る。(市河三喜―ことばの講座(1)53ペ)

のような評は、漢語の良き、力を述べたものだが、われわれは漢字・漢語を国語に活用すると共に、反面その弊についても常に反省を怠らず、あくまでも国語の正常な成長に培うべく努力せねばならぬ。

近來頼に盛んな洋語の攻勢に対しても、日本国民が国語に対し、深い理解と愛護を持つて之に接する限り、

日本語の中に西洋諸国の言葉が沢山入って来ましたが、いくら入っても日本語はどこまでも日本語で、日本語の根本の構造がそのために変つてしまふことは決してないものと考へます。(神保格

―ことばの講座(2)109ペ)

と言えるであらう。